

- 406 学習プログラミングの実験心理学的研究—I 加法九九プログラムのフレームの検討(1)―
 407 同上 ―II 加法九九プログラムのフレームの検討(2)―
 408 同上 ―III 読図学習における論理的記憶と機械的記憶との比較―
 409 同上 ―IV 読図学習効果の記号カテゴリー別検討―：堀内敏夫・①藤原喜悦・松野豊・④小池栄一（東京学芸大学）・②竹内泰之（学習研究社）・③伊東欣二（東横学園）

近年米国において、学習能率向上の方法として、ティーチング・マシン運動が脚光をあびており、我国においても昨年位から、視聴覚教育関係者によって紹介され、各方面で話題になってきている。本研究は、このティーチング・マシンのプログラムの心理学的研究の第一歩として、立教小学校の小林善彦氏によって試作されたプログラムを実験材料とし、その通過率からプログラムの問題点を検討し、プログラム作成の一般的問題の一助とする目的でおこなった。未だ未開拓の分野であり、満足のいく結果は得られなかったが、プログラム作成技術上の suggestion はかなり得られたと思う。

13. 学 級 構 造

- 601 社会的地位の低い児童の人格的特性：宮脇修（加納小学校）

一般に学級内での社会的地位の低い児童を二通りに分けると、反社会的児童と非社会的児童とに分けられる。これら、反・非社会的児童には、ノーマルな児童（社会的地位）と比べて、それぞれ行動的特性、あるいは人格的特徴があるように思われる。ソシオメトリック・テストを行って、社会的地位の低い児童をえらび、これらの児童に共通する人格的・行動的特性を、追求してみようとした。（特に適応力、要求不満といった面に考察を試みる。）

- 602 学級におけるリーダーについて：久保田貞慶（蕨市立第二中学校）

Leadership の問題は、種々な角度から検討されて来たが、本報告では、知能・学力・性格・基本的欲求等の面から、Leader が共通に有している特質を持つ者が、すべて、Leader であるか否かを考察してみたい。「逆必ずしも真ならず」という言葉があるが、一般に見受けられる報告は、 $A \rightarrow B$ という図式を示すのみで、 $B \rightarrow A$ が同時に成り立つか、従って $A = B$ を結論づけることが出来るかどうか不明なものが多い。このことは、我々のように現場に居る教師が、研究成果を利用しようとする時、いつもぶつかる壁の一つである。そうした点の要望の意も含めて報告したいと考えている。

- 603 学習場面におけるインホーム・グループの二・三の問題：桜田光男（東京学芸大学付属小学校）

学級集団の学習時間は全学校生活時間の約70%にあたる。然も教科学習の場は基底的には集団過程でもある。従って教科学習場面での集団構造化は学級集団の指導にとって重要な鍵となる。一方児童の学級生活では自然発生的人間関係に大きく依存している。このインホームな人間関係が教科学習場面でのどのような生態をとり、それによって学習の場がどのように変化するかを、小集団においてとらえていこうとする。更に又、このような変化がインホーム・グループにどのように受けとられていくかを実験的に考察するものである。